# 第1回持続発展教育(ESD)大賞
# 受賞校実践集

主催：NPO法人持続発展教育推進フォーラム
後援：日本ユネスコ国内委員会／財団法人ユネスコ・アジア文化センター／日本ユネスコ協会連盟
全国小中学校環境教育研究会／株式会社教育新聞社

# はじめに

Education for Sustainable Development（ESD）は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育と言われています。
地球上の様々な課題を、自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。
本年、NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、この ESD の理念に基づく取り組みを積極的に実践する学校を奨励する「持続発展教育（ESD）大賞」を設立いたしました。

本事業は、全国の持続発展教育に該当する実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続発展教育の発展に寄与することを目指しております。今回は、初めての募集にも関わらず、全国の小中高等学校よりご応募いただきました。
（小学校 13 件、中学校 8 件、高等学校 10 件、中高一貫校 3 件　計 34 件）

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではございましたが、第 1 回持続発展教育（ESD) 大賞として、5 校の学校を表彰し、ここにその実践をまとめさせていただきました。

本冊子が、少しでも持続発展教育の実践の参考・発展へつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。
　なお、第 1 回持続発展教育（ESD）大賞は、カシオ計算機株式会社様、ソーケングループ様 P&G ジャパン株式会社様、三菱東京 UFJ 銀行様よりご協力をいただきました。

# 第1回持続発展教育（ESD）大賞　受賞校

**持続発展教育（ESD）大賞**
東京都江東区立東雲小学校

**ユネスコスクール最優秀賞**
宮城県気仙沼市立唐桑中学校

**小学校賞**
奈良県奈良市立済美小学校

**中学校賞**
静岡県伊豆市立天城中学校

**高等学校賞**
岡山県立矢掛高等学校

## 【講評】　角屋　重樹

NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、国立教育政策研究所教育課程研究センター　基礎研究部長

「持続発展教育（ESD）大賞」は、各学校で正しいESDの概念にもとづいた教育が積極的に実施され、持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを狙いとして本年より設けられた、新しい取り組みです。

審査会では、この大賞設立の狙いと、応募いただいた実践が持続可能な社会づくりに関わる課題を見出し、解決するために必要な能力や態度を身につけることで、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質・能力・価値観を培うものであるかどうか、という考えに基づいて審査しました。さらに、学校全体としての組織的取り組み、教育課題への位置づけ、他の学校の参考となる独自の創意工夫などの観点も重視し、検討いたしました。

**持続発展教育（ESD）大賞　…　東京都江東区立東雲小学校**

〈受賞理由〉
ESDを教育課程全体に位置付け、それをまとめた「ESDカレンダー」を開発している。
学校全体で取り組んでいる点、またESDカレンダーがさまざまな場面で紹介され、他の学校の参考となっていることが高く評価された。

**ユネスコスクール最優秀賞　…　宮城県気仙沼市立唐桑中学校**

〈受賞理由〉
気仙沼市は、教育委員会のリードのもと市全体で持続発展教育に取り組んでおり、ユネスコスクールが最も多い自治体でもある。今回も多数の学校に応募いただいたが、当校の実践は夢や志を育てる素晴らしいもので、気仙沼市の学校を代表してという意味合いを込めて、ユネスコスクール最優秀賞に選ばれた。

**小学校賞　…　奈良県奈良市立済美小学校**

〈受賞理由〉
近隣にある世界遺産を最大限に活かし、6年間を通じさまざまな視点から地域学習を推進している。地域に対する子どもたちの思いを育てている点が評価された。

**中学校賞　…　静岡県伊豆市立天城中学校**

〈受賞理由〉
総合的な学習の時間を中心に、各教科の学習とのつながりを意識してカリキュラムを編成している。その学校全体の取り組みと、地域との関わりなどが評価された。

**高等学校賞　…　岡山県立矢掛高等学校**

〈受賞理由〉
「環境」という教科を開設すると共に、独自の「矢掛学」を設け、体験的、問題解決的に持続発展教育に取り組んでいることなどが評価された。

受賞校においては、これを機にさらに持続発展教育の取り組みに従事され、また、来年の第2回持続発展教育大賞に、より多くの学校が応募されることを期待しております。

# 持続発展教育（ESD）大賞

東京都江東区東雲小学校
小野　由美子

## 1．はじめに

本校は、学区域内にある国際交流館から外国籍の児童が多数通学し、江東区内唯一の日本語学級が設置されていることから国際理解教育の研究に取り組んできた。平成18年ユネスコスクールに登録されてからは、４つの視点（環境教育、人権・民主主義の理解と促進、地球規模の問題に対する国際システムの理解、異文化・自国文化理解）を踏まえて、教育活動の見直しを図ってきた。校内研修を通じて、「ESDって何？」という自らの疑問に答え、子どもにとって充実した、価値ある学習を進めるために「ESDカレンダー」が作られた。生活科や総合的な学習の時間と各教科・領域との関連性を図った年間指導計画である。また、児童相互の学び合いを深める場として「東雲フェスティバル」を毎年開いてきた。

平成22年度からは、教育課程にESDの推進を明確に位置づけ、学校教育全体を通じて取り組んでいる。

## 2．東雲小が考えるESDを通して育てる能力や資質

○実践的な態度・能力
自ら意見や考えを発信したり、相手の意見や考えを聞いたりして具体的に行動できる態度・能力

○相手を尊重する態度・能力
異文化を受容し、様々な人や文化と「つながる」ことのできる態度・能力

○世界的視野
国際社会に生きる日本人の育成、世界の中の日本人としてのアイデンティティを育てる。

上記の３つの態度・能力の育成から自己の確立を図る事を目指している。

## 3．子どもたちに資質や能力を育てるための方策

①体験的な学習の重視
②他者と交流する機会の設定（外国の方や専門家の方との積極的な交流）
③意図的・計画的な学習の実施（ESDカレンダーの有効活用）
④参加型学習、問題解決型学習の重視
⑤校内研究の活性化

平成21・22年度には研究主題【対話を通して学び合う児童の育成】を目指し、国語科を通じて取り組んでいる。

本校が考える「対話力」とは、互いに意見を出し合い対立や異なる考えを生かして、一人では生み出せない新たな考えや解決策を共に創り出す（創り出そうとする）力であり、話し合いのプロセスを通してよりより人間関係をつくっていく力であると捉えている。

## 4．実践記録と学習活動の継承

若手教員の増加や人事異動等によりこれまでの実践が途切れてしまうことが多々見られるのは本校ばかりではない。本校では、ESDカレンダー（年間指導計画）に沿って行った学習活動の記録を残すことにより、次年度に必ず引き継ぐ工夫をしている。児童実態や学校行事等により内容や時期、人材活用に多少違いが生じるが、各学年の「中心としたねらいや活動」を継承し、子どもたちの持続可能な学びの保障を目指している。

○実践記録項目
①実施学年
②ユネスコスクールとしての視点
③単元名（活動名）
④実施時期・日時・場所
⑤ねらい
⑥学習内容（活動内容）
⑦事前指導　既習学習（単元）とのかかわり
⑧事前準備・教材準備（人材手配、訪問先

との連絡、指導者役割分担など）

⑨学習（活動）の流れ（当日の時程など）

⑩事後指導　事後単元とのかかわりなど

⑪記録写真、実施案、資料などの保管場所

⑫他教科との関連・次年度に引き継ぎたいこと、児童の変容など

5．教員研修＝チャンスを活かす

特に21年度は、ユネスコスクール全国大会を始め、ユネスコスクール研修会やフルブライトジャパン日米教員交流ベストプラクティス・カンファレンス、日韓教員交流プログラム等に応募・参加する機会を得、多くの教員が各地に赴き自分たちの実践発表を行ってきた。事前にプレゼン内容について自主研修会で検討したり事後報告会を開いたりすることを通し、教員研修の重要な機会として活かしてきた。また、外国の教育使節団やESDに取り組んでおられる大学教授、これから取り組まれる全国各地の小学校教員等の学校訪問を受け入れ、児童の学習活動を直接見ていただいている。これは、自分たちの実践を振り返るとともに、指導方法の改善にもつながる貴重な場でもある。教員自らが広い視野と多くの人とのかかわりをもち、多くの実践者との連携を深めることがESDの推進にとって重要なのである。

6．関連性＝つながりの構築

国、都、区の政策事業（環境課題等）に取り組む際は、ESDの視点から「いつ、どの教科・領域と関連させ、どのような学習内容で活動するか」を意識して授業計画の中に位置づけている。単なるイベントでは子どもが変わらないからである。また既習の学習内容を活かし次の学習につなげるようなカリキュラムの構築も重要である。本校のESDカレンダーはまさに「つながりの構築」を目指しているのである。

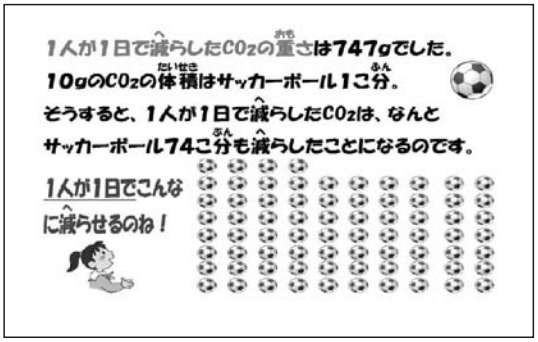
また、各学年で使用した資料や取り組み結果を全児童に分かりやすく説明したり図や絵にして掲示したりする場を設定することで関心を高め、意欲を継続させ「学びのつながり」を作ることも重視している。

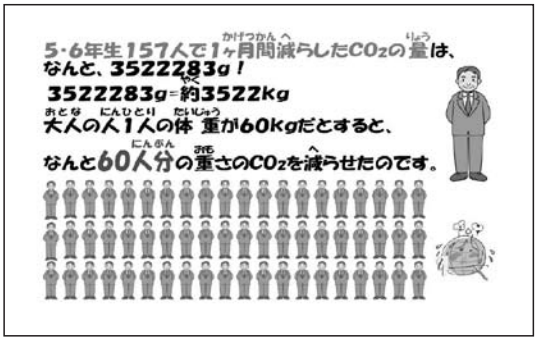
本校では、日常的に学習のまとめとしての発表を児童集会や学年集会等に位置づけ、他学年児童の気づきや発見につなげていこうとしている。

「東雲フェスティバル」はその積み重ねの総体であり、新たな学びのスタートにもなっている。

**22年度5．6年生のカーボンマイナス月間より取組結果の資料掲示の工夫**

東京都、江東区環境部におけるCO2削減キャンペーンの取り組みを通し、自分たちができること＝行動化による結果を全校児童に示すことによって関心を高め、意欲を継続させることができている。



7．実践事例1　**環境教育**

第3学年　生き物のすみやすい町

～ヤゴ救出作戦～

○ねらい

・身近な所（プール）にいたヤゴに親しみをもち、育てることで昆虫に対する理解を深める。

・ヤゴの生態を調べることを通し、環境の変化に目を向け、自然とのよりよい付き合い方を考える気持ちを育てる。

○時期（授業時数）

・6月～7月（20 時間）

○他教科との関連

・国語「ありの行列」道徳「トンボのすむまち」理科「生き物を調べよう」

○事前指導・既習学習

・2年生の地域探検（生活科）

・「歩いてみようわたしたちのまち」（社会5月単元）

・校内ビオトープ観察（理科4月単元）

○事前準備・教材準備

・ネイチャーリーダーへの依頼手続き、打ち合わせ

・教室での飼育（水槽、エアポンプ、羽化時の止まり木、餌）

・個人飼育（ペットボトル）

○学習の流れ

①ヤゴって何だろう

②ヤゴを救出するために大切なことは

③ヤゴを救出しよう

④ヤゴの生態や種類を詳しく調べよう

⑤もっと増やすために自分たちができることを考えよう→区のトンボ祭りに参加。発表

⑥全校朝会でみんなに発表しよう

⑦ネイチャーリーダーの方にお礼のお手紙を書こう

○事後指導、事後単元

・わたしたちのまち（社会）開発と環境について

・東雲フェスティバル発表に向けて（資料整理）

○次年度引き継ぎ

・年度によってヤゴの数に格差がある。対応策を講じておくこと。ヤゴ減少の一因を子どもたちに考えさせる。

実践事例2　**地球規模の問題に関する国際システムの理解**

第4学年　世界のたからもの、私たちのたからもの

～東雲・有明トレジャー～

○ねらい

・世界の文化の偉大さや素晴らしい自然について知り、その保存・保護のシステムについて理解する。

・自分たちの地域を見直し地域の宝物を大切にしていこうとする態度を育てる。

○時期（授業時数）

・11 月～1月（15 時間）

○他教科との関連

・社会科、国語、道徳

○事前指導・既習学習

・国語「一つの花」

・道徳「ふろしき」

○事前準備・教材準備

・世界遺産パネル借用（ユネスコ協会）

・訪問先連絡、打ち合わせ

○学習の流れ

①戦争を題材にした教材をもとに「原爆ドーム」について知る。

②「原爆ドーム」は世界遺産であり、世界には様々な遺産があることを知る。

③関心をもった世界遺産を調べ発表する。

④地域に目を向け、町の宝物について調べる。

⑤人々が大切にしていくことの意味について考え、発表する。

○事後指導、事後単元

・東京都、日本全国への広がりを社会科学習と関連して進める。

○次年度引き継ぎ
・建造物のみにとらわれず、人々の思いや願いに気づいていくことを重視する。

実践事例3　**地球規模の問題に対する国際システムの理解**

第5学年　ユニセフミュージアムへようこそ
～わたしたちの生きる世界～

○ねらい
・自分の思いや考えを発表し合い、世界の現状を理解する。
・様々な情報を収集し、活用能力や処理能力を高める。
○時期（授業時数）
・10月～1月（30時間）
○他教科との関連
・社会科「これからの食料生産とわたしたち」
・道徳「みんな地球っ子」
・国語「インタビュー名人になろう」
○事前指導・既習学習
・ユニセフ募金の経験やポスター掲示
・昨年度東雲フェスティバル発表
○事前準備・教材準備
・ユニセフハウス見学手続き、打ち合わせ
・ユニセフ協会より世界の子どもの現状に関する資料（パネル、DVD）
○学習の流れ
①自分のこと、相手のことを知ろう
②みんなの「幸せ」ってなんだろう
・「幸せ」のマインドマップ
③ユニセフってなに？
④ユニセフハウスを見学しよう
⑤ユニセフについて考えよう（各自追究課題をもつ）
⑥世界の様子をみんなに知らせよう。
⑦ユニセフ集会で発表しよう。
⑧東雲フェスティバルでもっと多くの人に知らせよう。
⑨自分たちのできることを考えよう
⑩募金をよびかけよう。
○事後指導、事後単元
・いのちかがやけ（人権・民主主義の理解につなぐ）
・6年「世界が平和になるために」
○次年度引き継ぎ
・募金活動の在り方について学習したことをもとに子どもたちに考えさせる指導方法の検討

実践事例4　**人権・民主主義の理解と促進**
**～平和・国際理解～**

第6学年　ひびけ　こころに！

○ねらい
・自国や世界の歴史を知り、平和を大切にしていこうとする態度を養う。
・世界の平和について自分の考えをもち、行動できる力を育てる。
○時期（授業時数）
・9月～2月（25時間）
○事前指導・既習学習
・国語「平和のとりでを築く」「自分の考えを発信しよう」
・社会「15年にわたる戦争」
・道徳「東京大空襲の中で」「白旗の少女」
○事前準備・教材準備
・ゲストティーチャーとの打ち合わせ
・資料収集（ユネスコ協会パネル、戦争紛争等文献）
・戦争体験談文献の読み合わせ
○学習の流れ
①戦争を題材にした教材をもとに「原爆ドーム」について既習学習を思い起こし話し合う。
②負の遺産についてその存在意義を考える。
③平和と戦争の違いを考える。

④争いの起こらない世界について話し合う。
⑤学年集会、全校集会で学習したことや自分の考えを発表する。
○事後指導、事後単元
・平和集会、東雲フェスティバル
○次年度引き継ぎ
・4年世界遺産「原爆ドーム」との関連
・平和に関する内容、特にユネスコの役割について4・5・6年の発達段階をおさえた学習活動の吟味

実践事例5　**異文化・自国文化理解**

第2学年　みんな　だいすき
～友だちの国を知ろう～
○ねらい
・自分の身近にいる友だちの国について知ることを通して、自国と外国の文化、生活、考え方などの違いや共通点に触れ、他国の人や文化に目を向けようとする気持ちを育てる。
○時期（授業時数）
・11月～1月（10時間）
○他教科と関連
・国語、特活、道徳
○事前指導・既習学習
・1年生活科「むかしあそび」「ふれ合い給食」
幼保交流会
○事前準備・教材準備
・食事調べ、正月の様子、遊び方、町の様子、国際交流館（外国の方の住宅）の様子などリサーチ
・ゲストティーチャーとの打ち合わせ
○学習の流れ
①自分たちの生活を振り返る。（食べ物、言語、学校、正月などの伝統行事、服装、町の様子）
②上記の中でくわしく調べてみたい項目を選ぶ。
③ゲストティーチャーの話を聞く。
④各国ごとに調べ、発表の準備をする。
⑤その国の友だちや保護者の方に内容を確かめてもらう。日本のことを調べた友だちの内容を見てあげる。
⑥発表会を開く。
○事後指導、事後単元
・東雲フェスティバルでの発表につなげる。
・世界のあそびを楽しむ。
○次年度引き継ぎ
・子どもどうしの交流を通して、互いの国の習慣や文化の違いを体験することを重視する。

8．国内外への発信

中国・韓国からの教育視察団を始め、アジア各国のユネスコ国内委員会の研修視察等を毎年受け入れてきた他、ユネスコ本部からマーク・リッチモンドESD担当部長、ドイツユネスコ事務総長のベルネッカー氏、国際統括官の木曽功氏など多くの来校視察を受け入れ、国際会議やシンポジウム等で学校教育におけるESD推進の具体的な方策について提案し続けてきた。

これからも様々な「チャンス」を活かし「教科等のつながり」を大切にし、自分たちの学びや生き方に誇りをもてるような子どもを育て「つづけること」を通じて、ユネスコスクール・東雲小学校として、さらなる発展を図っていきたい。

# ユネスコスクール最優秀賞

宮城県気仙沼市立唐桑中学校
藤山　篤

1　テーマ

ふるさと・エネルギー教育

2　ねらい

本校のESDは「ふるさと・エネルギー教育」である。

「持続的・発展的な社会をつくるため，ふるさとを思いながら，夢や志，プラスの気付きをもってエネルギーについて学習し，考えを発信していく」ことを目標としている。

私たちの住む気仙沼市は，県内南50kmのところに原子力発電所をもち，北の海岸線に，ウラン濃縮工場，低レベル放射性廃棄物埋設センター，再処理工場などの「原子燃料サイクル施設」を望む地域にあって，原子力を含め，エネルギーを正しく理解し，学ぶことを通して，資源・エネルギー問題を考えていくことが大切である。そこで，2050年，今の中学生が50歳になるころ，ふるさと唐桑のエネルギーをどのように供給し，利用していくかを考え，発信・提言していくことを主たるねらいとする。

3　活動及び実践内容

(1)　共通実践内容

4月　エネルギー学習に関する
　　全校・学年オリエンテーション

10月・11月　研究のまとめ

10月　文化祭における中間発表

11月　学年発表会

12月　全校発表会（保護者参観）

学年発表会

全校発表会

(2)　1年生　学年テーマ

**「地域を知ることと物質の循環」**

自分たちが生まれ育ったふるさと，唐桑を深く知ることをきっかけに，海における物質の循環，生活における物質の循環について，課題を見つけ，講話と体験活動から学ぶ。

4月　早馬山から俯瞰的に地域を見て，環境を知る。

（協力　早馬神社）

早馬山頂上から大島方面を望む

まとめ：個人新聞

7月　海に流れ込む川のはたらきから水の循環について学ぶ。

（協力　NPO「森は海の恋人」）

海上から湾に注ぐ川を望む　唐桑を臨む

10月　物の循環，リサイクル等について学習する。

（協力　NPO「森は海の恋人」，NPO「大島大好き！」，三陸EM研究会，佐々木産業（リサイクル業者）等）

アルミ缶回収のようす　　佐々木産業にて

学校給食油リサイクルバイオディーゼル燃料

まとめ：グループ，模造紙（新聞形式）

(3)　2年生　学年テーマ

「事業所等のリサイクルと
エネルギー問題の実際」

海の物質循環においてさらに理解を深めるとともに，海のエネルギーについて学習する。さらに，職場体験において，事業所等のリサイクル意識やエネルギー問題の実際について調査する。

4月　海のエネルギー，海の物質循環について学習する。

MARE：海を学ぶための
科学教育プログラム
（協力　志津川ネイチャーセンター）

MARE：
海流による海の汚染の拡大について学ぶ

実験
汚染物質の拡散について

風による
拡散の実験

まとめ：個人新聞

10月　気仙沼市内の事業所等のリサイクル意識・エネルギー意識について確認する。

まとめ：個人新聞
グループ，模造紙（新聞形式）

(4)　3年生　学年テーマ

「2050年　私たちの唐桑」

リサイクル・エネルギー問題の先進地域における取組を調査する。加えて，視野を広げてエネルギーを学び，2050年の唐桑エネルギーについて考える。

4月　東京近郊のリサイクル・エネルギーの先進事業所等について訪問し，学習する。

まとめ：個人新聞

7月　東北大学浅沼先生による「エネルギーについて」出前授業

地球温暖化，エネルギー学習の基本
環境家計簿　等

まとめ：個人感想レポート

浅沼先生　唐桑のエネルギー環境について

10月　原子力エネルギーの必要性，有用性について講義

火力・水力・原子力発電について

自然エネルギー等について

送電の仕組み等について

（協力　東北電力）

まとめ：個人感想レポート

東北電力　原子力発電について

11月　女川原子力発電所訪問

まとめ：個人感想レポート

女川原子力発電所
原子炉の模型を見る

放射能・放射線について講義

（協力　東北電力）

まとめ：個人感想レポート

東北電力　ガイガーカウンターで
自然放射線を測る

原子力の三陸への影響について講義

（協力　NPO「森は海の恋人」）

まとめ：個人感想レポート

NPO 森は海の恋人　六ヶ所村の放射性物質がどのように拡散するか

東北大学浅沼先生による「エネルギー学習のまとめ」出前授業

環境省　ドラえもん型サツキ・メイ型の未来について

まとめ：個人感想レポート

浅沼先生　少量の熱エネルギーで動くファン

エネルギーについて課題解決学習

まとめ：個人パソコンプレゼンテーションソフト（Power Point）

1月　「2050年　原子力発電所は必要か，不必要か」というディベートを通して，資源・エネルギー問題を考える。

まとめ：個人感想レポート

ディベートのようす（2009）

(5)　その他の生徒の活動

①　英語弁論（3年）

「We can change our future.」

英語弁論大会の代表として発表。春季休業中にオーストラリアの生活で経験した，家の中の電気の明るさ，スーパーやコンビニエンスストアの照明，冷蔵，包装等の違い，自動販売機の数の少なさ等を比較検討し，省エネルギーな生活のしかたを提案した。

②　学級の取組

ア　1年3組　エコキャップ運動

文化祭壁新聞でリサイクルについて取材したことから，エコキャップリサイクルが発展途上国のワクチンに交換できることを知り，学級独自で取り組む。

イ　2年2組　未来予想模型

文化祭学級制作で唐桑の近い未来のエネルギー予想模型を作成

唐桑半島未来予想図

③　生徒会活動　ボランティア委員会

長年続けてきたアルミ缶リサイクルのポスター掲示，呼び掛けなどをさらに積極的に発展した。生徒，保護者，地区に協力を要請，多くのアルミ缶が集まった。佐々木産業（前述）で換金した後，車いす3台を購入，福祉施設に寄贈した。

アルミ缶回収を呼び掛けるポスター

(6)　国際交流

ACCUや気仙沼市教育委員会の招聘により，10月には中国教師団が来校し，理科エネルギーの授業（燃料電池・燃料電池車模型）を参観した。また，1月には韓国の教師 3名が「原発は必要か?不必要か?」というディベートを見学。

(7)　教員研修

指導する教師側がエネルギーについて基礎的基本的なことをより広く，より深く理解している必要性を感じ，「宮城県原子力・エネルギーに関する教育支援事業」による補助を受け，夏季休業中に2泊3日の研修を行う。

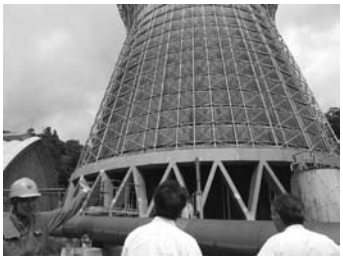
①　青森県六カ所村原子燃料サイクル施設

②　岩手県葛巻町クリーンエネルギー施設

③　岩手県八幡平市松川地熱発電所

上　使用済核燃料輸送容器
右　低レベル核廃棄物処理模型

葛巻町　風力発電



八幡平市　松川地熱発電所

4　成果

(1)　成果

資源・エネルギー問題が，持続的で発展的な社会をつくっていく上で，喫緊の問題で，自分たちにとって大きな課題であることを理解した。

課題解決学習においても，インターネットや資料，パンフレット等を活用し，深く調べる生徒もいて，意欲・関心が高まった。

また，プレゼンテーション等表現力も高まった。

(2)　生徒の感想から

①　資源・エネルギー問題を自分のこととして考えていかなければならないと思った。

②　地球温暖化を考えて，私たちは二酸化炭素を極力出さないような自然エネルギーの利用を考えていくべきであると思う。

③　原子力発電は使わないですむのならそれがよいが，現在のところ石油・石炭にかわるエネルギー資源が考えられない現状では仕方ないと思う。今後，日本の将来を担う私たちが新しいエネルギー資源を開発していく必要がある。

などと，資源・エネルギー問題が，自分の身近な問題であり，今後も真剣に考えていかなければならないことであると態度が変化した。

5　課題

(1)　全体計画の見直し，再構築

学年間の系統性，連携等の吟味。また，他領域・教科との関連をさらに検討する必要がある。

(2)　情報発信の方法について

紙媒体の通信・たよりばかりでなく，双方向性をもったHP，Blog等の必要性があり，国際交流等を含めて，発信・受信ができるようにしたい。

(3)　保護者，地域へのエネルギー学習の啓発

(4)　エネルギー教材・教具の整備・拡充

「宮城県原子力・エネルギーに関する教育支援事業」による補助を受け，観察実験器具については今年度中に拡充可能である。

今後は，講師やNPOへの謝礼，生徒の移動費等をどのように工面するか工夫が必要である。

(5)　指導者側の研修の必要性

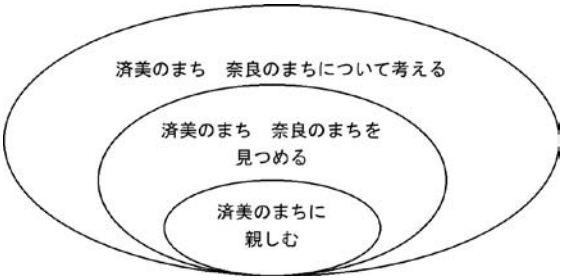
指導する教員がより広く，より深く資源・エネルギー問題について理解しなければならない。

# 小学校賞

奈良県奈良市立済美小学校
大西　浩明

地域に学び地域に誇りと愛着を
－世界遺産学習－

奈良市立済美小学校では、学校全体の取組として世界遺産学習を進めている。本校の近くには、世界遺産「古都奈良の文化財」に含まれる元興寺や興福寺があり、奈良町や奈良公園にも歩いていけるというメリットを生かし、地域に残る『もの・こと・人』を題材に生活科や総合的な学習の時間を中心に、いろいろな場面で世界遺産学習を展開している。様々な視点から地域について調べ、学び、考える学習を積み重ねることで、地域に誇りと愛着がもてるようにしたいと考えている。




まず１・２年生の生活科において、済美のまちのよさを感じ、そこに住む人たちのやさしさに触れることで『済美のまちに親しむ』。さらに、３年生では校区の様子を社会科で学習したり、総合では奈良町について学習したり、また４年生では四季を通じて奈良公園の自然を観察したり、地域の発展に尽くした人を調べたり発信したりする活動などを通して、『済美のまち　奈良のまちを見つめる』。そして、５年生での世界遺産見学や世界遺産を守るためにできることを考える学習、６年生での歴史学習をふまえた地域の遺産を探る学習などを通して『済美のまち　奈良のまちについて考える』。このように、低学年から空間も内容も同心円的な広がりをもって地域について学び続けるカリキュラムをつくっている。特に、高学年では、毎年新たな教材を開発しながら取り組んでいる。

【2009 年度の実践から】

1年生

『なかよしさんぽ』（生活科）

1学期は校内や校庭を散歩して、学校のみんなとなかよくなり、「わたしの学校」のよさをたくさん感じ取った。また、校区内の児童公園にも出かけ、豊富な自然の中で散歩をして、「わたしの町」のよさにも目を向け始めた。２学期は、平城宮跡や奈良公園に出かけ、虫取りや木の葉・木の実集めなどの楽しい体験を通して、「わたしの奈良」のすばらしさに気付くことができた。集めた木の葉や木の実を持ち帰って、「あきのリースづくり」をしたり、「木のはのはりえ」「ネックレス」「ドングリめいろ」「おめん」「まとあて」「つりゲーム」など、思い思いの作品作りをしたりして秋を楽しんだ。「なかよしさんぽ」を繰り返す中で、子どもたちは、『ひと・もの・しぜん』となかよくなって、自分の生活を楽しくしていく力を身に付けてきた。

子どもの感想

・ならこうえんのイチョウのはっぱは、きみどりにきいろがまざっていたので、すごくきれいでした。ならこうえんていいなあとおもいました。
・みやげものやのおじさんが、いちょうのはっぱをたくさんおとしてくれました。きいろの雨がふってきてとってもきれいでした。

2年生

『わくわくさんぽ　せいびの町』（生活科）

1学期に全員で行った町探検で感じた、「ここにこんなものがあったんだ」「もっとすてきな場所を知りたいな」「みんなにも知らせたいな」という思いを大切にするため、2学期には自分が見つけた『すてきな場所』をまず紹介しあった。消防署や生涯学習センターなどの公共施設をはじめ、155年前から続いている砂糖屋さん、竹細工の店、古いお寺、井戸のある八百屋さん、昔ながらの魚屋さん、1丁ずつ焼くたい焼き屋さんなど、14か所が出てきた。そこで、グループに分かれて見学に行き、そこの人たちと触れ合いながら「見て・触って・やってみる」体験をさせていただいた。その後、それぞれが体験させてもらったことを、「みんなに伝えたいな、○○のこと」で発表会をしたり、お世話になった方にお礼の手紙を書いたりする活動を通して、自分たちが選んだ『すてき』な場所がより好きになった。さらに、せいびの町にはすばらしい場所がたくさんあることや、せいびの町のよさや人々のやさしさを知り、より身近に感じられるようになった。

子どもの感想

・町の人に喜んでもらいたくて毎日がんばっていることが分かりました。
・昔ながらの雰囲気を大事にして商売しているそうです。
・この人たちのおかげで、わたしたちは安心してくらせるんだなと思いました。

3年生

『もっと知ろうよ　済美の町を』（社会科・総合）

2年生の生活科での「町探検」や、3年生になっての社会科「校区をしらべよう」から発展させて、夏休みの自由研究では、『済美のじまん』や『済美のふしぎ』を調べる活動を行った。校区にある奈良町は、世界遺産に登録されている元興寺の旧境内を中心とした一帯である。そこで、そのことを元興寺東塔跡の見学などから知り、さらに、そこに住む人たちが文化財や町屋の町並を存続させたいという強い願いをもち、様々な努力をされてきた結果、地域が活性化されて現在があることを、「ならまち格子の家」や「奈良町資料館」での見学や聞き取りなどから知ることができた。また、大仏の大きさを実際に体育館に描いてみるなどの活動も行った。

子どもの感想

むかし、ここにあった五重塔が72ｍもあったなんてびっくりしました。ぼくの住んでいる花園町の由来が、元興寺の花畑だったことを聞いて、今の元興寺とちがって、むかしはとても広かったんだなあと思いました。

4年生

『奈良公園の自然探検』（理科・総合）

『平城宮跡を守った棚田嘉十郎』（社会科）

広大な奈良公園には、様々な自然が存在する。ドングリ一つとっても、様々な形や種類のものがある。季節が移れば違った姿を見せる。誰も草刈りをしないのに1200頭の鹿がいることで雑草だらけにならない。その鹿の糞を分解する小さな虫がいることで奈良公園は糞だらけにならない。そして、その小さな虫の細かな糞が芝生の栄養分になる。そんな奈良公園の様々な自然や仕組みについて、ゲストティーチャーについてもらいながら、四季にわたって4回奈良公園に出向き、現地学習を行った。そこで知ったり感じたりしたことを、各自がフォトストーリーにまとめ、発信した。

また、社会科「きょう土の発展につくした人」では、平城宮跡の保存に一生を捧げた棚田嘉十郎を取り上げた。奈良市で植木業を営んでいた棚田嘉十郎は、平城宮跡に強い関心をもち、私財を投じて一面田んぼになっていた跡地を買い取ったり、国に訴えたりして、保存運動に尽くした人物であり、現在の朱雀門横に嘉十郎の銅像が建っている。そんな嘉十郎の業績や生き様に学び、これから自分たちが奈良の世界遺産を守っていくことの大切さを感じることができた。

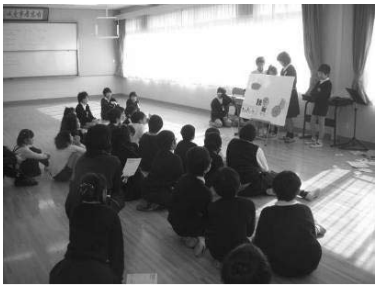
子どもの感想

春・夏・秋・冬と奈良公園をたんけんしたけれど、いろいろとかわったところがあってびっくりしました。季節によっていいところがあるんだなあと思いました。自然のことがいっぱい学習できて、この学習はとっても大切だと思います。

5年生

『昔話から考える奈良のふしぎとすてき』（総合）

1学期、奈良の世界遺産見学の際に、観光ボランティアガイドの方々から聞いた奈良にまつわるいろいろな話に興味をもった。他にないかと父母に聞いても分からない。そこで、地域の古老や寺の住職、奈良町落語館の方などに奈良に伝わる民話や伝説などの聞き取りを行った。「猿沢池の龍」「奈良の寝だおれ」「奈良町の身代わり申」など、多くの話が分かった。そこには、奈良の人々のいろいろな思いが込められていることを感じ、なんとか自分たちがそれらの語り部となっていきたいという思いが生まれた。そこで、パネルシアターを制作し、校内で全校児童に向けて発表したり、幼稚園に出向いて園児に発表したりした。



子どもの感想

わたしは、奈良のよさをもっとみんなに語っていこうと思います。この学習をする前の自分たちのように、昔話を知らない人や奈良に昔話があるということを知らない人がたくさんいると思うからです。わたしたちがみんなに言えば、どんどん広まっていってくれると思います。わたしは、昔話がなくならないことを願っています。

6年生

『未来に残したい
美しい奈良の風景を見つけよう』（総合）

江戸時代、奈良のガイドブック的役割を果たした「南都八景」（春日野の鹿・東大寺の鐘・南円堂の藤・三笠山の雪・猿沢池の月・佐保川の蛍・雲井阪の雨・轟橋の旅人）について調べたり、現地へ行ったりした。すると、今も見られる風景もあれば、もう見られなく

なった風景があることを知り、現代の「新南都八景」を自分たちで選定し、広く発信して美しい奈良を守っていきたいという思いが生まれた。そこで、地域に在住する大人816人に「あなたが美しいと思う未来に残したい奈良の風景とはどこの何ですか?」というアンケートをとった。すると、175もの項目が出てきて、奈良にはこんなにも多くの美しい風景が存在するということに児童は驚いた。そして、上位の約30の風景を調べたり話し合ったりして、「佐保川の桜」・「若草山の山焼き」・「二月堂のお水取り」・「奈良公園の燈花会」・「氷室神社のしだれ桜」・「五重塔の青空」・「奈良公園の紅葉」・「浮見堂の夜」という『新南都八景』を選定した。そして、それを世界遺産学習全国プレサミットや地域の人を学校に招いた「ありがとう集会」などで発表した。

子どもの感想

奈良にはこんなにも「美しい風景」がたくさんあるなんてびっくりしました。同じ場所でも季節や時間、天気がちがうだけでもちがった美しさがあることも驚きでした。この美しい風景を、もとの南都八景のようになくなってしまわないように、自分たちが行動して奈良を守っていくことが大切だと心から思いました。

音楽科

『わらべうたで遊ぼう』（３年）

地域にある奈良市音声館[おんじょうかん]を訪れ、「おちゃらか」など、昔から伝わっている遊び歌があることを知る。低学年のときに教えてもらった「奈良の大仏さん」というわらべうた、“ならのならのだいぶつさんは　てんぴにやけて…”という歌詞の「てんぴ」は、「天日」つまり、太陽のことで、戦国の争いによって大仏殿を失い、野ざらしになっている大仏のことを表している。ここでは、教えてもらった「にんにんここのつ」という手まり唄や、奈良のおん祭に由来する「大さむ　こさむ」をみんなで実際にやって楽しみながら学習をした。

子どもの感想

音声館でわらべうたを二つ教えてもらいました。「大さむ　こさむ」は、だんだん鬼がふえていってドキドキしました。「奈良の大仏さん」も、わらべうただということがわかりました。ほかには、どんなわらべうたがあるのか、もっと知りたいと思いました。

図画工作科

『奈良のお寺や仏像を描こう』（５年）

まず、仏像は「天・明王・如来・菩薩」の4つに分けられることやその役割を知り、自分の好きな仏像を写真で見つける。そして、その仏像のどこが好きかを考えながら和紙に墨で描いた。さらに、色画用紙に奈良の寺を屋根の形や柱などに気をつけながら同じく墨で描き、そこに前に描いた仏様が訪れているように、または住んでいるように貼り、各自の作品を完成させた。いくら身近にあっても、お寺や仏様を見る機会は子どもたちにはあまりない。本物ではなく写真を見て描いたというのは残念ではあるが、この活動を通して興味をもち、これがきっかけとなって身近な本物を見に行くようになってほしいと思う。

子どもの感想

・わたしの好きな仏さまは、千手観音坐像です。目が細く、下を見ているような感じが好きです。
・ぼくの好きな仏さまは、日光菩薩立像です。二重あごのところと、目がすごくやさしそうで好きです。

家庭科

『奈良の郷土料理“奈良のっぺ”を作ろう』（６年）

奈良に伝わる郷土料理は、奈良のっぺや茶がゆなど 243 点あるといわれている。夏休みの自由研究で、

奈良の郷土料理を調べた子もいて、家庭でも郷土料理を受け継いでいこうとする心を育てたいと、その中から、春日若宮のおん祭の振舞い料理として伝わる奈良のっぺを作ることにした。各地にのっぺい汁はあるが、奈良のっぺは精進物でのっぺ用の油あげと里芋、大根、にんじん、ごぼうを乱切りにしたものと、こんにゃくなどを煮込んだものである。味付けは家庭によって違うが、塩と醤油を入れて薄味に仕上げる。煮込んだ里芋が自然ととろみをつけてくれる。実習では、友だちと協力しながら調理をし、おいしくできあがったことが自信につながったのか、家にある野菜で作れることや作り方が簡単であることがよかったのか、家庭でも作ってみたら家族にほめられた等の後日談もけっこうあった。

子どもの感想

奈良のっぺはかんたんにできて、おいしかったです。今までとちがって、給食の奈良のっぺを意識して食べるようになりました。家でも作ったら、「おいしい」と評判でうれしかったです。今度はもっと奈良のものを作りたいです。

【活動の成果】

世界遺産をはじめ、数々の文化遺産に囲まれて生活している子どもたちにとっては、それらは当たり前の風景として存在するものであって、本当の価値やそれがそこにあることの意味を知らないままで過ごしているのが実状である。そこで、様々なアプローチで自分たちの住んでいる済美や奈良を見つめ、知ることによって、済美や奈良に誇りと愛着がもてるようになり、ひいては持続可能な奈良の担い手を育てることにつながると考えている。「奈良を知り」「奈良に触れ」「奈良の人と関わる」ことで、奈良に残る様々な文化遺産を未来へ大切に残し、繋いでいくその可能性が広がるものと信じている。

本校では、2008 年度より学校全体で世界遺産学習を教育課程の中に位置づけて取り組んでいるが、年を追うごとに、「こんな学習はどうか」「こんな活動もできるのではないか」と、職員みんなが新たな実践に取り組んでいる結果、様々な実践が積み上がってきている。

６年間の地域を見つめる活動を通して、「済美や奈良の町が好きになった」という評価が、児童でも保護者でも増えてきた。そんなすてきな奈良を大切に守っていきたいという強い思いが、児童の中に生まれてきている。奈良の多くの遺産は、放ったらかしにしていては残していくことができない、そこには必ず人の力が必要だということを実感できるような学習や活動を今後も積み重ねていきたい。

# 中学校賞

静岡県伊豆市立天城中学校
大塚　明

『天城学習』を通して生徒の自尊感情を高める
～ 総合的な学習を中心としたESDカレンダーの作成 ～

## 1　実践の概要

本校の教育課題の一つとして、生徒の『自尊感情』が低いということが上げられる。課題解決のために様々な手だてを考えた結果、ESDの「持続可能な社会の担い手づくり」という視点で教育活動全体を見直したいと考えた。

天城に住んでいながら地域の良さを実感として感じていない生徒に、地域の自然や文化・歴史のすばらしさを実感させるため、地域での体験活動や地域の人とのつながりを重視する必要がある。また、教科の学習や総合的な学習を通して、世界規模で起きている課題にも気づかせる必要がある。そこで、世界規模で起きている環境問題が、実は天城山でのマメザクラやクマザサの枯損やシカの食害とつながっていることを理解し、地域を『持続可能な社会』にしていくために自分たちに何ができるか考え、行動できる生徒を育てたいと考えた。そのためには、今までの総合的な学習をESDの視点で見直し組み替えていく必要がある。また、総合的な学習と各教科との横断的なつながりの見直しが必要となるため、本校独自のカリキュラム開発を研究テーマとして設定した。総合的な学習と各教科・道徳・特別活動の学習とのつながりを意識して組み直し、体験と地域の人とのつながりから学び・考え・行動することで本当の意味での『生きる力』が育っていくと考えた。

## 2　本校の概要

①　所　在　地　静岡県伊豆市月ヶ瀬853
　・伊豆半島の中央部に位置する小規模校
②　全校生徒数　214名（H22.12.1現在）
③　学　級　数　7クラス（3・2・2）
④　校　訓　　『克己』（こっき）

作家の井上靖氏が幼少期を過ごした土地で本校には「故里美し」（ふるさとうるわし）という自筆の原稿が残されている。この文の中に「克己」という言葉が書かれているため校訓となっている。

## 3　学校経営方針

**学校・保護者・地域の連携を基に
信頼にこたえる学校づくりを推進する**

①　生徒・保護者・地域に開かれた学校
②　こころざしをもって自ら学ぶ生徒が育つ学校
③　持続可能な社会の担い手が育つ学校
④　誰もが生き生きと生活し学ぶ喜びを味わえる学校
⑤　教職員が協働し、たゆまず資質向上に努める学校

## 4　生徒の実態

・　明るく素直な生徒が多い。
・　挨拶がよくできる。
・　比較的落ち着いた生活態度である。

- 素直に注意が聞ける。
- 行事を通して絆を深めてきた。
- 自分に自信が持てない生徒が多い。
- 人間関係づくりが下手。
- 授業態度が受け身な生徒が多い。
- 家庭学習の時間が不足している。
- ネットや携帯の時間が多い。

## 5　本校の教育課題

本校は、天城山周辺の農山村地帯で、温泉が出るため観光や農業に従事している家庭も多い。
しかし、近年の不況のあおりを受けて老舗の旅館が倒産するなど観光業が振るわない状況にある。

家庭環境は、三世代そろった家庭が多い中、離婚して実家に戻っている母親を中心に、母子・父子家庭などの片親の割合が 15.4%と多い。そのため、子どもたちは様々なストレスを抱え、思春期を迎えていろいろな心的症状を現している。

そのような中、平成 19 年度から行われた全国学力・学習状況調査の結果を毎年比較して見ると、「自尊感情」の項目が全国基準と比較して大きく落ち込んでいることがわかった。このことは、以前から感じていたことで、この「自尊感情」を何とかしたいと様々な手だてを探ってきた。今までに、学校行事や委員会活動から清掃まですべての活動を1年から3年までの縦割り班で行い、先輩が後輩を指導することを通して「自己有用感」を育んできた。

しかし、中学校という限られた狭い人間関係だけでは「自尊感情」を高められないことがわかり次の手だてを探っていたとき、ESD（持続発展教育）と出会い、これだと直感した。

## 6　ＥＳＤの視点で生徒の現状を見直す

①　生徒の現状　→　地域に誇りをもてない

天城に住んでいながら
地域のよさやすばらしさを知らない

⇩

地域の自然や歴史・文化の
すばらしさを実感させたい

②　これからの方向性　→　地域に誇りをもつ

生徒にいかにして自信や誇りを持たせるか

⇩

ESD
持続可能な社会の担い手を育てる教育

体験を通して地域のよさを知る
地域の人とつながる
地域の未来像を描く
自分たちにできることを考え・行動する

地域に
誇りをもつ

③　**Think Globally Act Locally**
（ESD の大切な視点）

グローバルな視点　→　各教科で育てる

世界規模で起きている課題の理解
地球温暖化　資源の枯渇
生物多様性の危機　紛争・戦争
食糧問題　飢餓・貧困　etc.

ローカルな視点　→　総合的な学習で

地域で起きている課題の理解
天城山のマメ桜の枯損　鹿の食害
クマザサが壊滅状態　八丁池の水位
ブナが枯れ始めている　etc.

⇩

世界と地域の課題のつながりの理解

## 7　研究のてだて

ESD の視点で学校教育全体を見直したとき、前述のように生徒の現状とこれから進むべき方向性が見えてきた。そこで、今まで行ってきた総合的な学習を生かしつつ、そこに ESD、つまり「持続可能な社会の担い手を育てる」という大きな筋を通して組み替えていった。また、総合的な学習だけでは補えない学習内容は各教科で補うことを考えた。

手だて 1

「持続可能な社会の担い手づくり」という視点で教育活動全体を見直し、総合的な学習をESDの視点で組み直す。

ポイント

① 地域での体験活動の重視

② 地域の人とのつながりの重視

このように、各教科・道徳・特別活動と総合的な学習を結びつけようと考えたとき、各教科で学習したばらばらな知識を総合的な学習の時間で「**活用**」し、また総合的な学習で体験を通して学んだり、考えたりしたことを教科の学習で深め「**探求**」し、また総合的な学習や特別活動の時間を使って「**行動**」まで発展させる可能性が見えてきた。

このようなサイクルを実現するためには、総合的な学習と各教科・道徳・特活とのつながりを意識した独自のカリキュラムが必要となる。そこで、毎年実績を積み上げ、修正を加えながら３年計画でＥＳＤカレンダーを作る計画を立てた。

手だて 2

各教科・道徳・特別活動と総合的な学習との横断的なつながりを見直す。

本校独自の
つながりを重視したカリキュラム作成
＝ ESD カレンダー

## 8　研究の目指すもの

ESDは、「つながり」を喪失している子どもたちにとって、「つながりの再生をめざす人間形成の学び」と言える。

各教科・道徳・特別活動での学びと、地域での体験や地域の人とのつながりを通して、自ら学び自ら考え、主体的に判断し、正しいと思ったことは臆せず行動に移せる大人に育ってほしいと願っている。また、このような学びや体験を通してこそ、本校の教育課題である「自尊感情」を高めることができると考えた。

価値観が多様化し、変化の激しい21世紀を生き抜く力、つまり「生きる力」とはこのような学びを通してこそつけられると確信している。

目指すもの

地域を「持続可能な社会」にする

体験と地域の人とのつながりから
学び・考え・行動する

「自尊感情」 ⇩ を高める

「生きる力」を身につける

天城の自然にふれ、その豊かさに癒されると同時に、天城の山が抱える多くの問題を知ることとなりました。（３年）
2009.11.10

## 9　実践内容

（1）　総合的な学習の時間の見直し

できるだけ今まで積み上げてきたものを生かしながら、「持続可能な社会の担い手を育てる」という視点で3年間の総合的な学習の時間を組み替えた。

## 総合的な学習の時間『 天城学習 』計画

**福祉体験学習 1年**　地域の福祉施設で直接体験学習

デイサービス、介護老人保健施設、老人福祉施設等での体験を通じ、思いやりの心を育て、よりよい生き方や共生の意味を考える。

**宿泊体験学習 1･2年**　地域の自然環境で直接体験学習

天城山の縦走を経験することにより身近な自然に変化があることを実感し、環境意識を高め、地域の自然を持続するための方法を考える。

**職場体験学習 2年**　地域の職場で直接体験学習

地域を支える仕事や産業について考え、地域が現在の経済を維持し、持続可能な発展をするためには何が必要かを体験を もとに考える。

**修学旅行 3年 地域学習 3年**　地域の持続発展を提言

「2020年夢天城 ～10年後、天城の魅力を持続・発展しよう～ 」をテーマに、京都・奈良をモデル都市としてその魅力を探ると共に、天城の魅力や課題を新たに発見し、今後の地域の持続発展を見据えた提言をする。

天城自然ガイドクラブの方々の説明はとてもわかりやすく説得力があった。（2年）2010.5.21

| | 第1学年 | 第2学年 | 第3学年 |
|---|---|---|---|
| 4月 | 福祉体験学習準備 | 宿泊体験学習準備 | 修学旅行準備 |
| 5月 | 福祉体験学習<br>5/20（木）22（土） | 宿泊体験学習<br>5/21（金）22（土） | 修学旅行（奈良・京都）<br>5/20（木）21（金）22（土） |
| 6月 | 福祉体験学習まとめ<br>宿泊体験学習準備 | 宿泊体験学習まとめ<br>職業体験学習準備 | 修学旅行まとめ<br>地域学習準備 |
| 7月 | | | |
| 8月 | | | |
| 9月 | | | |
| 10月 | 宿泊体験学習<br>10/28（木）29（金） | 職場体験学習<br>10/27（水）28（木）29（金） | 地域学習<br>10/28（木） |
| 11月 | 宿泊体験学習まとめ<br>総合発表会準備（福祉・環境） | 職場体験学習まとめ<br>総合発表会準備（職業・環境） | 地域学習まとめ<br>総合発表会準備（地域への提言） |
| 12月 | | | 進路学習 |
| 1月 | | | |
| 2月 | 総合発表会2/5（土） | 総合発表会2/5（土） | 総合発表会2/5（土） |

ESD-J の講師と共にこれからの持続発展教育のあり方を考える

（2）　ESDカレンダーの作成

職員研修にESD－Jの方を講師として迎え、全職員で3年間の総合的な学習を見直し、それを基に各教科・道徳・特別活動とのつながりを結びつけていった。

## 10　これまでの成果

（1）　地域との様々な連携により生徒も教師も地域とのつながり（絆）が強くなった。
また、それと共に相互理解が深まった。

・天城地域の様々な商店・旅館・民宿
・天城地域の寺・神社・歴史研究家
・天城地域の様々な団体・NPO
・伊豆市の文化協会・観光協会・生涯学習課
・井上靖ふるさと会・写真家・等

地域の方にも職員のESD研修に加わっていただきました。
2010.8.20

（2）　生徒は、天城山のクマザサが壊滅し、ブナやマメ桜が枯れ始めている現状を知り、何とかしなければいけないという課題意識が芽生えてきている。

（3）　クマザサやマメ桜の枯損の原因のひとつが増えすぎた鹿の食害であることを知り、鹿を何とかしなければという意識が生まれている。

（4）　天城には京都や奈良にも負けないくらいの文化財や誇れるものがあり、そのような地域を愛するたくさんの大人がいることに気づいた。

（5）　教職員は、研修を通してESDへの理解が深まると同時に、同僚性が高まり協働意識が育ってきている。

鹿により皮を全部剥かれて食べられた枝（職員下見）
2010.4.11

天城縦走の後森林管理所の職員と一緒に達成感を身体いっぱいに感じた（2年）
2010.5.21

地元の旅館経営者に話を聞いた。
2010.10.14

## 11　今後の課題

（1）　生徒が抱いた課題意識をどのように行動に導いていくか。

（2）　総合と各教科のつながりを意識した天城中ESDカレンダーを完成させること。
（3年計画で毎年修正しながら完成させる）

（3）　教職員の同僚性を更に高め、協働の意識を育てると同時に、全教師がESDのファシリテーターとなり、次の教員に引き継いでいくこと。

（4）　ユネスコスクールとしてのメリットをどのように生かしていくか。

・地域の小学校との連携
・国内外の加盟校との交流

（本校の研究に関わっていただいたすべての方に感謝します）

# 高等学校賞

岡山県立矢掛高等学校
室　貴由輝

## 環境教育を入り口としたESD

### 1．はじめに

矢掛高校では平成16年からの矢掛商業高校との再編整備を機に、矢掛商業高校の総合的な学習の時間における「環境教育」の実績を踏まえ、「環境や環境問題に関心・知識を持ち、人間と環境とのかかわりについての総合的な理解と認識の上にたって、環境に配慮した生き方ができる技能や思考力、判断力を身に付け、地域社会の中で環境に対して主体的に働きかける態度や行動力を育成する」ことを目標に教科「環境」を開設した。

教科「環境」には「環境基礎」「環境演習Ⅰ」「環境演習Ⅱ」「環境科学」の4つの科目を設け、身近な環境問題から、地球規模の環境問題まで幅広く学習するとともに、持続可能な社会とは何か，持続可能な社会の構築に向けて自分達に出来ることは何かを考えさせる授業を展開している。ほぼ全教科の教員が教科「環境」の授業に関わり、教科の枠を超えてティームティーチングで指導にあたることにより、単に自然保護や科学的数値の検証、環境問題に関する解説の詰め込みに偏ることなく、環境問題が生じる社会的背景やその多面性を捉えながら、日常生活と結びつけて考え、問題解決の方法を見つけ出していける授業を目指している。さらにこれらの授業で得た知識を深化させ、具体的な事象との関係性を認識させるために「白石島ESDプログラム」「発電所視察」「ゴミゼロ宣言の町上勝町視察」などの希望者を対象とした行事も実施している。また、活動を通じて意識の高まった生徒が地域での様々な環境保全活動を行う有志団体「川レンジャー」も継続的な活動を行っている。本校では、この教科「環境」を中心とした環境教育を入り口としてESDを推進している。

### 2．教科「環境」のねらい

・環境と環境問題に対する関心や感受性を高めるとともに、環境問題に積極的に取り組む姿勢を育てる。
・環境に対して責任を持ち、様々な環境問題に主体的な働きかけができる態度を育てる。
・環境や環境問題を正確に捉える科学的な技能や分析力を身に付け、地域社会に働きかける能力を育てる。
・環境や環境問題を多様な経験を通して理解し、環境問題を科学的，社会的，経済的視点に立って捉える諸能力を育てる。
・環境や環境問題を客観的に捉え、環境に配慮した生き方ができる思考力や判断力を身に付ける。

### 3．教科「環境」の概要

(1) 環境基礎

1年次生全員の必修科目として「環境基礎」2単位を設定した。この科目は、一般的な環境問題の講義であるが、まず『環境眼鏡』の概念を導入することから始める。環境眼鏡とは「身の回りの事象を批判的な視点を持って見る」という概念を表したものである。日ごろ目にしている日常の風景から視覚教材を作成し、通常の生活では見過ごされてしまっている問題に気づき、自分たちの生活そのものに問題意識を持たせることをねらいとしている。

最近では、小中学校で環境に関する学習を経験した生徒も増えてきている。しかし、系統立てた環境教育は確立していないため、一つの環境問題を取り上げた調べ学習にとどまっていることが多い。また、環境問題に関する情報も地球温暖化を中心としたグローバルな問題が多く、自分たちの生活と関連づけることができていない場合もある。このようなことから、「環境基礎」の前半では廃棄物や水などの身近な問題を認識させることに重点を置いている。その後、地球温暖化や酸性雨、野生生物種の減少などの地球環境問題へと発展させていき、後半には循環型社会から持続可能な社会の構築へのプロセスで自然環境に限らず歴史、文化や国際関係まで言及し、ディベー

トやパネルディスカッションで考え方を深化させている。

教材として各単元の「ワークシート」を作成した。ワークシートには授業のキーワードや自分の考えを書く欄を設けており、授業の内容に沿って生徒自身が書き込む形となっている。また、他人の意見を書き込む欄も設けた。これは授業を通して意見の交換をし、他人の意見を受け入れ自分の意見を主張する力を身につけることを目的としている。このようなワークシートを用い、ディスカッションを含めた授業を展開した。また、身近な問題の単元では家庭科、保健、化学、現代社会などとの関連を意識させながら授業を行った。地球環境問題の単元では、現代社会、地理、化学、生物、英語などとの関連を意識させている。

(2) 環境演習Ⅰ

２年の選択科目として実習を中心とした選択科目「環境演習Ⅰ」を設定した。地域の自然環境を理解するとともに、環境問題の多面性を理解し、多角的に探究することができる態度や行動力を育成することをねらいとした。前半では、環境や環境問題を正確に捉える科学的な技能や分析力を身に付けるための基礎的な実習を行う。その後、環境問題を科学的、社会的、経済的視点に立って捉える諸能力を育てるための講義を行い、後半では自分たちの興味、関心に基づきグループによる課題研究を行う。 探究活動の成果はコンピュータを活用して発表を行う。

自然科学分野では水生生物、水質調査、発電システムなど、社会科学分野ではゴミの分別、漂着ゴミ、地域の観光資源などについての探求活動を行っている。

「環境演習Ⅰ」の授業の様子

(3) 環境演習Ⅱ

３年では、選択科目「環境演習Ⅱ」を設定した。自然環境や環境問題に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的・創造的な学習態度を育成することをねらいとし、２年次の「環境演習Ⅰ」でのグループ活動で学んだことを発展させ、グループや個人で研究テーマを設定し、課題研究を行う。

環境演習Ⅱでは研究内容も専門的になってきており、関連教科の教員による指導が必要になってくるため、一講座に３名の教員を配置している。研究内容も自然科学分野では抽水植物による水質浄化について、竹粉を活用した土壌改良材について、県産材の活用について、絶滅危惧種（淡水魚）の保護増殖についてなど、社会科学分野では森づくり県民税について、川のゴミと海の漂着ゴミの比較について、耕作放棄地対策と地域活性化について、エコツーリズムについてなどである。探求活動の成果は校外での研究発表会や環境関連イベント等において、コンピュータを活用したり、ポスターを用いたりして発表を行う。また、研究の過程で、問題解決へむけて啓発活動の必要性を感じるグループもあり、校内外において啓発イベントの企画・運営も行っている。

(4) 環境科学

３年では、もうひとつの選択科目「環境科学」を設定した。環境と社会をテーマに国や企業の環境に関する取り組み、環境保全に関する諸法令や廃棄物処理，リサイクル，新エネルギー等に関する技術を学習するとともに、持続可能な社会を実現するために必要な行動力や態度を育成することをねらいとし、「環境基礎」で学習した環境と環境に関する問題についての学習をさらに深める内容となっている。

(5) 教科「環境」関連行事

本校では「環境」を教科としての開設を計画した時点で、地域との連携と専門機関との連携を必要不可欠なものと考えていた。

現行の学習指導要領に基づいた各教科の教科書を見ても、ほとんどの教科で「環境」や「環境問題」に関する内容を取り扱っている。しかし、環境に関する専門的な教育を受けていない私達は、各自で日々変化しながら深刻化していく環境問題とその原因になっている社会的背景について理解し、教材として取

り扱っていかなくてはならない。実際、国語、社会、数学、理科、家庭、保健体育、商業、英語の教員で構成している本校の「環境科」のなかでも「環境や環境問題」の捉え方や問題意識には大きな差がある。このような現状の中、教員だけによる教材開発、授業展開では環境教育の目的を達成することは困難であり、外部機関との連携は必然であった。

また、ESDとは従来的な教育の方向から、環境・経済・社会の面において持続可能な将来を実現できる価値観と行動に結びつくものにパラダイムチェンジしていくことであり、具体的な行動、体験、体感の重視、自発的な行動を学ぶことを通して、体系的思考力、人間･多様性･環境を尊重する価値観、批判力、情報収集と分析能力、コミュニケーション能力を育むものである。複数の外部機関との連携の中から、「環境」に関する体験活動を伴う行事が開発された。

①白石島 ESD プログラム

瀬戸内海に浮かぶ人口約 650 人、高齢化率 58%超の島で体験的な活動や島の歴史や文化の学習を通じて、人間の活動と環境とのかかわりについて理解させる。また島における持続可能な発展のための課題を認識するとともに、環境、経済、社会などの事象の関係性を認識すること、それらを体系的に思案すること、そして、自発的な行動をどのように起こすかを発想することをねらいとしたプログラムである。

| | |
|---|---|
| 第1日目 | |
| 10:00 | 講義I「白石島の現状と課題」白石島公民館長 |
| 11:20 | 講義II「白石島を知ろう!!」岡山大学ユネスコチェア |
| 13:20 | 実習I「シーカヤック体験」 |
| 15:50 | 環境保全活動I「海岸清掃」 |
| 18:15 | 実習II「白石島踊り体験」 |
| 21:30 | 実習III「夜の水辺観察」 |
| 第2日目 | |
| 8:30 | 実習IV「自然観察（トレッキング）」 |
| | 環境保全活動II「遊歩道整備」 |
| 14:00 | 講義III「持続可能な社会の実現に向けて」矢掛高校ふりかえり |

・講義Ⅰ「白石島の現状と課題」

白石島公民館長による、島の歴史や現状、少子高齢化や医療機関・交通機関などの課題についての講義。

・講義Ⅱ「白石島を知ろう」

島の環境問題の背景・歴史的、文化的な背景についての講義。

・実習Ⅰ「シーカヤック体験」と環境保全活動Ⅰ「海岸清掃」

無人島に漂着したゴミの現状

シーカヤックで、無人島へ上陸し、漂着しているゴミの量や種類などの実態を観察した。その後、白石島に戻り、海岸清掃を行う。

この活動では、陸からは見ることのできない目線で、海上にゴミがあること、潮の流れによって別の場所から島に漂着していることを理解することを目的とした。

・実習Ⅱ「白石踊り体験」

遊水池の浚渫を行った後に白石踊りを体験するという、島で伝統的に行っていた活動を実施したいのだが、現状では池の浚渫が不可能なため、講義Ⅰ・Ⅱで概要と意義について伝え、白石踊りを体験するのみとした。

白石踊り体験

この活動では、島の伝統的な行事が引き継がれていることを実感し、文化を伝承することの大切さと伝統的な文化と環境保全との関連について理解することを目的とした。

・実習Ⅳ「自然観察（トレッキング）」と環境保全

活動Ⅱ「遊歩道整備」

島の山頂への遊歩道を草刈り等の作業を行いながら登る。この活動では、景観を楽しむこと、自然環境を保全することの大切さを感じること。また、環境保全には労働力が必要であることを実感し、白石島では少子高齢化により環境保全活動が滞っていることを理解することを目的とした。

・講義Ⅲ「持続可能な社会の実現に向けて」

２日間のプログラムのまとめとして「ふりかえり」と「わかちあい」を行う。白石島が持続可能であるかどうかについて考え、またどうすれば持続可能になるのかを議論する。他者の意見を聞くことにより、異なる視点や多様な考えがあることを理解し、考えを共有することで今後の活動の方向性を見出すことを目的とした。

多くの生徒が環境問題と少子高齢化のつながり、環境問題と経済の関係、環境保全と地域の歴史・文化とのつながり、河川と海の関係などについて気付いた。またプログラム実施後の活動も環境保全に関する啓発活動、ボランティア活動への積極的参加、幼稚園での環境学習会実施など大きな変化があった。

②発電所視察研修（エネルギー教育）

火力発電、原子力発電、風力発電、太陽光発電、その他のエネルギー関連施設の見学を行い、エネルギー生産現場の規模や内容、家庭で使えるようになるまでの行程を理解する。また、発電方法の違いを施設・設備、周囲の自然環境の違いから捉えるとともに周辺地域に与える影響等についても理解し、それぞれの地域に適した発電方法の組み合わせや経済活動との関連について考えを深めることをねらいとしたプログラムである。

③環境イベントへの参加

岡山県環境文化部主催の「おかやまエコ＆フードフェア」をはじめ、近隣自治体や大学、環境関連団体が主催する環境イベントへ積極的に参加している。本校の教科「環境」での取り組みに関するポスター発表や環境保全に関するワークショップを実施すると同時に、企業や団体、大学等の出展ブースにて最先端の取り組みに触れることを狙いにしている。

④上勝町視察研修

徳島県上勝町を訪問し、特徴的な取り組みについて視察を行っている。全国初の「ゴミゼロ宣言」による34種分別、葉っぱ産業で有名な「彩事業」、地区ごとに町を活性化するアイデアを競い合うユニークな取り組みの「１Q運動会」などの取り組みについて視察し、研修を通して得たものの見方や考え方を将来設計能力や意志決定能力に発展させることをねらいとしたプログラムである。

ゴミの34種分別を見学する

⑤その他の活動

教科「環境」の授業を通じて意識の高まった生徒が地域での様々な環境保全活動を行う有志団体「川レンジャー」がある。町内の河川の清掃活動や水質調査、希少野生生物の保護増殖活動、地域のイベントでの啓発活動、幼稚園や小学校での環境教室実施などの継続的な活動を行っている。

川レンジャー（ポケット水族館の管理）

## ４．成果と課題

矢掛高校では、環境教育をESDの入り口として考えている。学校設定教科「環境」の授業、「白石島ESDプログラム」、その他の環境関連行事をとおして、

持続可能かそうでないか、どうすれば持続可能になるかという考え方ができる生徒が増えてきた。また環境に関する問題の多くは、Yes か No で答えられる単純なものではない。その原因を理解するためにも多面的に物事を見る力が必要になる。さらに問題の解決になると、より複雑な思考が必要になる。このようなことから問題を理解するためには多くの教科の知識が必要なこと、問題を解決するためには、様々な社会的な問題や経済的な問題、宗教的な問題などを理解する必要があることに気付き、学習意欲を高める生徒も増えてきており、学力の向上や進路実現にも成果が現れつつある。

しかし、学校全体に ESD の意識が浸透しているわけではない。今後どのように全体に浸透させていくかが大きな課題である。また、教科「環境」の授業や「白石島ESDプログラム」などの関連行事を通じて、高まった「持続発展（SD）」意識をさらに発展させるためのプログラムは準備できていない。白石島やその他の活動で気付いた「つながり」や「かかわり」を矢掛町やそれぞれの地域で活かすことができるようなプログラムを開発していく必要がある。さらに社会的・経済的な側面を考える生徒には、グローバルな視野がもてるようなプログラムが必要となる。今後ユネスコスクールのネットワークを活用し、発展的なプログラムを作り上げていきたい。

## 5.「環境」から「やかげ学」へ

本年度より、ＥＳＤの新たな取り組みとして、「やかげ学」を開設した。環境教育を通して深まった地域とのつながりをいかし、矢掛町と本校が協定を結び、矢掛町についての講義を受けた後に、矢掛町の施設において本校生徒が職場実習を行う学校設定教科である。「地域との連携を重視した様々な形態の学習活動をとおして、他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、『かかわり』『つながり』の重要性を理解する。また社会に積極的に寄与する能力を育成し、持続可能な社会が実現できるような価値観と態度を養う」ことを目的にしている。２年次に矢掛町の歴史や文化、町づくりについての理解を深めた後、地域の公共施設、福祉施設、小学校などで毎週２時間、１年間の実習を行い、３年次後期には実習での活動内容や成果と課題、自身の成長についてプレゼンテーションや地域に向けた提言などを行う授業である。様々な体験活動を通じて、多様な立場の人や異世代の人とふれあうことにより、自己を見つめ直し、人との心のつながりや社会とのつながりの大切さを理解すること、また、社会人としての責任を体感することにより、社会規範意識を身につけ、思いやりの心を育み、自尊感情のある自立した人間へと成長し、持続可能な社会をつくる担い手となることをねらいとしている。

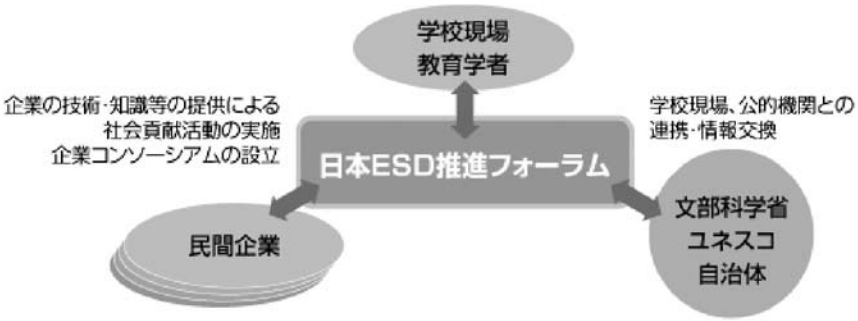
「やかげ学」の実習（小学校）

矢掛高校では、平成 23 年度より ESD の考え方を基盤におき、学校設定教科「環境」と「やかげ学」を柱に教育活動を行っていくことを明確に示した。まだまだ多くの課題を抱えているが、すべての教育活動を通じて持続可能な社会づくりのための担い手をつくっていきたい。

# ＮＰＯ法人日本持続発展教育推進フォーラムについて

NPO 法人日本持続発展教育（ESD）推進フォーラムは、発想豊かで、柔軟性に富んだ早い時期から、持続発展教育を取り入れることが大切だと考え、持続可能な社会を担う人として、具体的なビジョン持った子どもの育成を目指し、2009 年 5 月に発足いたしました。

「社会の担い手を育てるため、ESD を教育現場へ推進する」という共通の目標のもとに、産・官・学が共同するための橋渡し役となって活動しています。




**主な活動**

■教育関係者へ向けた活動

学校教育の現場で ESD を普及していくため、主に教員を対象にした研修会等を全国各地で開催します。

■ユネスコスクールの普及

ユネスコスクールの目指す研究テーマと ESD のテーマが一致していることから、文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会では、ユネスコスクールを ESD の推進拠点として位置づけ、加盟校の増加に取り組んでいます。当 NPO でもその活動をサポートしています。

■社会全体で子どもを育てる仕組みづくり

企業や自治体・団体等の力で『持続可能な社会づくりの担い手』をどのように育成していくか考え、実行していきます。

■ユネスコスクール全国大会 持続発展教育（ESD）研究大会 の実施

ユネスコスクール、教育関係者、自治体･団体、企業関係者がＥＳＤの実践研究について相互交流を図るとともに、日本における ESD の普及・発展を考える研修会を開催しています。

■持続発展教育（ESD）大賞

ESD を実践している、全国の小中高等学校の中から優れた活動に対し、持続発展教育（ESD）大賞を贈ります。

■ホームページを通じた情報提供

ESD の実践紹介など、最新の学校現場の状況をお伝えしていきます。企業や団体・自治体などが制作した ESD の趣旨に合う教材を集めたネットライブラリを開設しています。

（NPO 法人持続発展教育推進フォーラム　ホームページ：http://www.jp-esd.org）

第1回持続発展教育（ESD）大賞
受賞校実践集

発行日：平成23年3月15日
発　行：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム
http://www.jp-esd.org
〒110-0005 東京都台東区上野 3-17-7
Tel：03-3832-3581
Fax:03-3832-3570
E-mail：info@jp-esd.org